

物性科学領域横断研究会「凝縮系科学の最前線」

および凝縮系科学賞授賞式

2010年11月13日(土)から15日(月)にかけて、東京大学浅野キャンパスの武田ホールにて、第4回物性科学領域横断研究会が開かれました。この領域横断研究会は、物性科学に関する複数の特定領域と新学術領域の研究グループが合同で研究会を開くことで物性科学全体のますますの発展を目指すものであり、2007年度に特定領域研究の代表者であった秋光純先生の提唱により始まりました。今年度は、昨年度から継続の3つの特定領域研究「スピン流の創出と制御」(代表:高梨弘毅)「配列ナノ空間を利用した新物質科学:ユビキタス元素戦略」(代表:谷垣勝己)「フラストレーションが創る新しい物性」と2つの新学術領域研究「重い電子系の形成と秩序化」(代表:上田和夫)「分子自由度が拓く新物質科学」(代表:鹿野田一司)に、今年度からスタートした2つの新学術領域研究「対称性の破れた凝縮系におけるトポロジカル量子現象」(代表:前野悦輝)と「コンピューティクスによる物質デザイン:複合相関と非平衡ダイナミクス」(代表:押山淳)が加わり、7つの領域による合同開催でした。口頭発表19件、ポスター発表102件と大盛況の中で研究会は進行し、特に活発な議論が行われたポスター会場は熱気にあふれていました。

本特定領域からは、常次宏一氏の「フラストレート系の新奇な磁性と伝導」、香取の「フラストレート磁性体が磁場下で示す特異な物性」の2件の口頭発表と多数のポスター発表がありました。「フラストレーション」はどの領域においても関連する概念であり、他の領域の参加者との間で活発な質疑応答が展開されました。

初日には、この研究会の恒例行事でもある凝縮系科学賞の授賞式が開催されました。第5回の今年度は、実験部門では木須孝幸氏(阪大)が「超高分解能光電子分光法の開発」の業績において、理論部門では小林未知数氏(東大)が「量子乱流に関する理論的研究」の業績において、それぞれ受賞されました。両氏のような若手の先駆的な研究が、今後の物性科学の発展を支えていくことと思います。初日の最後に開催された懇談会では、川村光代表が乾杯の音頭を取り、参加者全員で物性科学領域のますますの発展を祈念しました。

様々な物性科学領域が集まった研究会ですので講演内容は多岐に渡りますが、各講演者が他の領域参加者にも理解しやすいように工夫した発表を行っているため、最前線の研究成果やトピックスを学ぶにはとても良い機会です。また、この研究会の開催は、互いの研究内容を知ることだけではなく、各領域間のつながりを深めることにも意義があると思います。来年度も開催が期待されるこの研究会に、本特定領域がメンバーとして参加できるのは残り1回となりますが、今後もこの有意義な研究会の開催が引き継がれていくことを期待します。

(香取浩子)

